

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 三木町下高岡～井戸の歴史を訪ねる

講師 千葉 幸伸

(三木町文化財保護審議会委員)

平成24年2月26日(日)

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

1 白山神社

祭神 伊邪那美命
いざなみのみこと

由来 白山の西麓からは弥生時代の銅鐸が見つかっており、住居遺跡も多く、いわ

ば三木町のまほろばの地です。白山の南麓には白山神社が下高岡村の鎮守の神として

祭られています。室町時代に書かれた「極楽寺宝蔵院古曆記」には「延長四年（九二

六）に極楽寺の明海が白山権現はくさんごんげんを三木郡高岡郷に勧請

した」とありますが、実際にはもう少し後のことでは

よう。また、江戸時代に書かれた「全讃史」には、「白

山の下に明海という者がおり、占筮せんぜい（うらない）の術

にすぐれており、人々は白山相人そうじんと呼んだ。また清明

ともいわれ箕みをつくることを業としていた」とありま

す。明海は、越前（現福井県）の人で、白山妙理権現

を迎えて祭ったところから、この山が白山と呼ばれる

ようになったのではないかといわれます。

社伝によれば、泰安じごんぼうという僧（のち慈嚴房と改名）

の夢に、白山妙理権現、剣山大権現つるぎさん、蔵王権現が現れ、



白山神社の入口（後ろに見えるのが白山）

国家安全、万民豊樂を祈るようお告げがあり、そこで泰安は神社と七堂伽藍を建て、はくわんざんけんしょうじ白雲山劍性寺と名付けました。この寺は靈驗あらたかで、人々の信仰を集め、鎌倉時代の聖一国師（三木郡白山生まれの僧）もこの劍性寺に学んだと伝えられています。南北朝時代（十四世紀）、細川清氏が南朝に味方し、阿波（現徳島県）から讃岐に来て、白山の麓で挙兵したのは、この劍性寺が、大覚寺派（南朝方）の寺である宝蔵院極樂寺に属しており、当時、かなり強い勢力を持っていたからだろうと推測されます。その経済力を裏付けるように、境内付近から古銭のいっぱい入った南北朝期の壺が発見されています。

白山権現は白山はくさん（石川県・岐阜県にまたがる山）の山岳信仰と修験道が融合した神仏集合の神で、白山妙理権現とも呼ばれ、全国各地の白山権現社で祀られ、その多くが神道の白山神社です。

2 下高岡小学校・中学校跡

明治七（一八七四）頃、四条小学校が鰯河神社内に設置され、白山に白山小学校が設立されました。明治二十年四月、下高岡村と井戸村との組合立尋常小学校が井戸村公文明に設置され、下高岡村には簡易尋常小学校が置かれました。明治二十五年四月、井戸村との組合立尋常小学校は解消され、新たに白山南麓に下高岡尋

常小学校が設立されました。

戦後になり、昭和二十二年（一九四七）四月、下高岡中学校が併設され、昭和三十五年には三木中学校下高岡教場となりました。現在の三木中学校に統合のため廃校となったのは昭和三十七年のことです。

また、下高岡小学校も昭和四十六年に井戸小学校と統合されて現在の白山はくざん小学校ができたため廃校となり、この白山南麓の地に長く続いた学校は、その役目を終えたのです。

現在は宿泊・保養・スポーツの施設ができ、多くの利用者が賑わっています。

3 古代の南海道

白山の南麓を東西に走る道は長尾街道ですが、古代の南海道とほぼ一致しています。正確にいえば現在の長尾線の軌道あたりまで上がった所が南海道跡ではないかと思われます。なぜかという、一つの理由は、現在の長尾街道沿いに流れている古川が昔はもっと広がったと考えられるからです。もう一つの理由は、条里制の基準点が現在



下高岡小学校跡の碑

の白山駅あたりに想定されるからです。

現在も長尾街道は白山駅の下あたりで屈曲し、方向を変えています。この屈曲は条里の基準点を定めた時、また南海道の方角を決めた時（おそらく白鳳時代）に遡るものと考えられます。

4 白山高等小学校（木田高等女学校、高松東高校白山分校）跡

現在ウォーキングセンターとして賑わっている場所はもと白山高等小学校があつた場所です。当初、寒川および三木二郡の組合立長尾高等小学校として長尾西村に建てられていましたが、明治三十年（一八九七）四月に分離して、三木郡井戸村外六か村（下高岡・奥鹿・平井・氷上・田中・牟礼）の組合立三木高等小学校が下高岡村のこの地に設置され、その後、明治三十三年二月、牟礼・田中の両村が組合を脱退したため、下高岡村外四か村（奥鹿・井戸・平井・氷上）組合立白山高等小学校と改称されました。高等小学校の開設は地元の強い熱意によって実現したものです。



白山高等小学校跡
（現ウォーキングセンター敷地）

明治四十一年四月、初めて女子中等教育の学校として下高岡村外四か村（井戸・奥鹿・氷上・平井）組合立白山女学校が白山高等小学校内に併置されました。明治四十三年四月に昇格して白山高等女学校と改称し、修業年限を四か年、生徒定員を二百名としました。大正二年（一九一三）四月、木田郡立木田実科高等女学校が創立され、白山高等女学校に併設されました。その後、大正五年三月、白山高等女学校は生徒の卒業と同時に廃校となり、木田実科高等女学校のみとなり、大正十一年四月に組織を変更して県立に移管し、香川県立木田高等女学校と改称しました。しかし地理上の関係から大正十三年五月、前田村東前田（現高松市前田東町）に校舎を建築し、落成と同時に移転しました。

昭和二十三年（一九四八）四月、戦後の学制改革により木田高等女学校が香川県立木田高等学校と改められた際に、川島・東植田・古高松と並んで氷上村に氷上分校が設置されました。普通科のほか、農業科（男子）と家庭科別科（女子）が置かれ、午前中のみの定時制課程で、午後には生徒は帰宅し、食糧増産のため農業を手伝っていました。田植えや稲刈りの農繁期には、長い農繁休業がありました。農業に多くの人手が必要な時代で、農業後継者を育成するのが開校目的でした。

昭和二十四年九月、氷上分校は下高岡白山農業倉庫に移転して校名を下高岡分校とし、さらに木田高等学校白山分校と改称しました。昭和二十六年、白山高等女学校の

跡地に二階建ての新校舎を建設し、落成と同時に移転しました。

昭和三十年代に入ると、白山分校を卒業した地元の指導者が次々と生まれ、三十年代後半になると、一日の授業時間が四時間から六時間になりました。

昭和四十年代に入り、生徒数が急増する一方、高度経済成長と農業の機械化により、農家の子弟を対象とする昼間定時制の存在意義が薄れ、普通科への入学志向が強まったため、四十一年に農業科・家庭科は廃止され、普通科のみとなりました。

白山分校と並んで設置されていた東植田分校は昭和二十七年十月三十一日に、川島分校は同四十五年三月三十一日に、古高松分校は同四十六年三月三十一日にそれぞれ廃止されましたが、白山分校は全日制への編成替えにより存続する方針となり、同五十一年四月一日に全日制課程普通科が設置され、同五十四年三月三十一日には定時制課程普通科は廃止されました。

以後二十年間、全日制として歩みましたが、三木高校が開校することになった平成八年（一九九六）の三月三十一日に閉校となり、半世紀近い歴史を閉じました。県内に三十五校あった分校の最後の一枚でした。閉校に先立ち、学校関係者、卒業生代表、



ウォーキングセンター敷地内の記念碑

平井知事（当時）らによる閉校式が行われ、「香川県立高松東高等学校発祥之地、白山分校之跡」と記した記念碑が除幕されました。

現在はウォーキングセンターが建設され、地域間交流や社会教育活動の拠点施設としての役割を果たしています。

5 三木町に残る条里制地割り

白山駅のあたりで条里の基準線と古代の南海道が屈曲しているということを見ましたが、ウォーキングセンターの東南の角でも屈曲が見られます（下の写真）。

では条里制とはいったい何でしょうか。

条里制とは、日本において、古代から中世後期にかけて行われた土地区画（管理）制度です。ある範囲の土地を約一〇九メートル間隔で直角に交わる平行線（方格線）により正方形に区分するといふもので、現在も日本各地に条里地割りの遺構が残っています。

条里の基本単位は約一〇九メートル四方の正方形で、古代日本では約一〇九メートルは一町（六十歩）に当たり、約一〇九メートル四方の面積も同様に一町と呼ばれ



道路とそれに沿った水路が、写真中央地点で屈曲し、西側（写真奥方向）へと延びている。

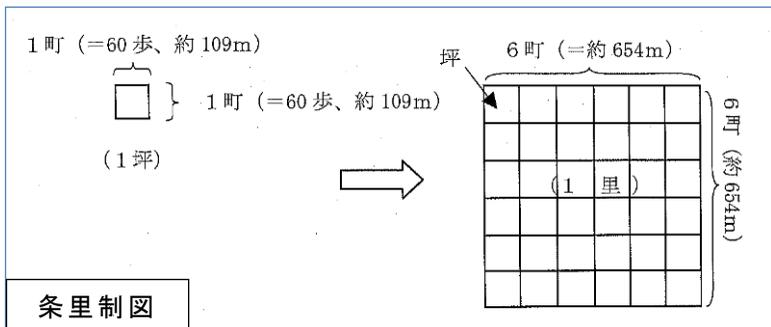
ていました。この一町四方からなる基本単位を「坪」と呼びましたつぼ（現在でも使用される「坪」とは異なります）。基本単位である「坪」を六×六に並べた区画（六町四方の正方形）は「里」と呼ばれました。古代、田地の所在も、これをもとにして何条何里何坪で示されていました。

条里の数え方は、その土地によって多少異なりますが、讃岐では、各郡の東の端から六町ずつの間隔で南北に引いた線により、東西に土地を区画し、これを「条」と呼び、東から西へ順に一条、二条、三条と数えました。

また、各郡の条を南から北へ、六町ずつの間隔で東西に引いた線で、南北に区画して「里」と呼び、南から北へ順に一里、二里、三里と数えていたようです。

この「条・里・坪」の名称は、土地の位置を表すのに正確で便利であったため、後世まで用いられ、今でもそれが地名となつて残っているものがあります。

三木町では、井戸の二条・氷上の三条・下高岡の四条などの地名が残っていて、旧三木郡の郡境、つまり本町井戸地区の東端と長尾町（現さぬき市長

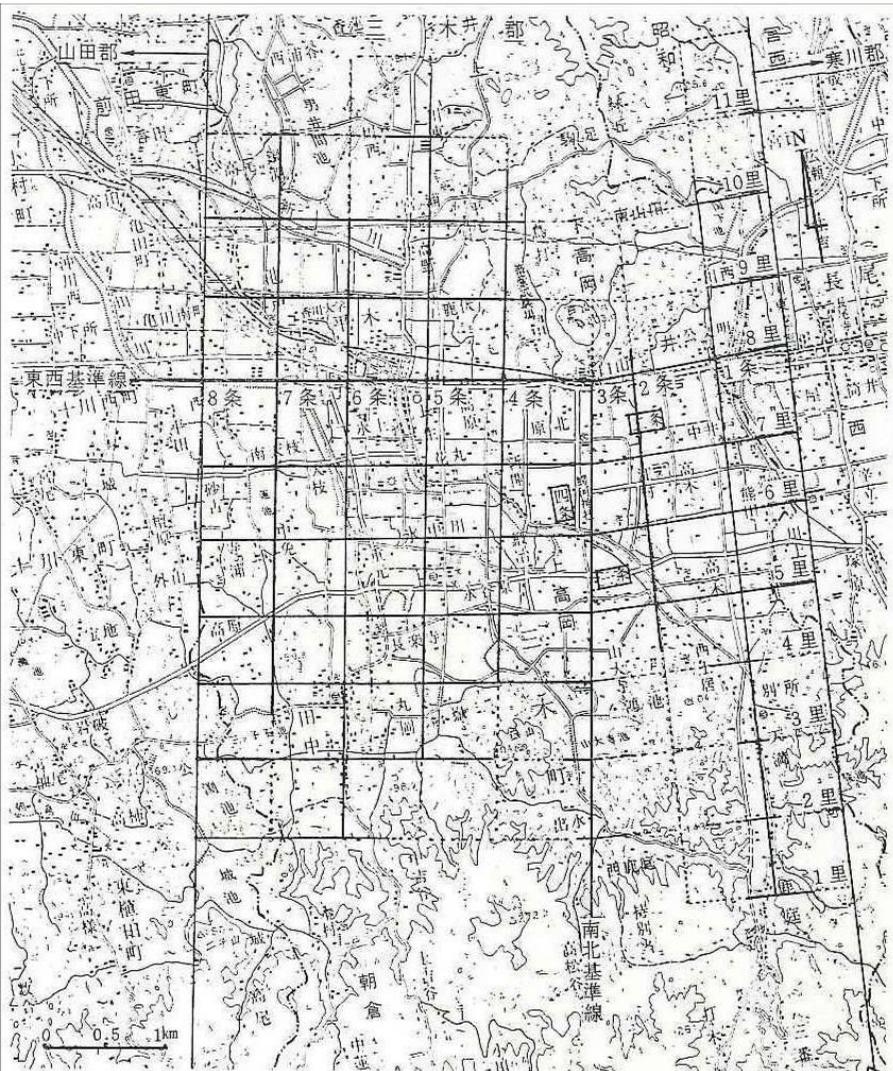


尾)の境から平井・田中地区の西の境までを一条から八条までに区画してあったようです。また、旧山田郡も、十河地区の二条、林町の六条などの地名が残されていることから、条里に区画されていたと推察できます。これらのことを総合すると、三木町との境から西の旧香川郡との境までを、一条から九条まで区画してあったことが分かります。

旧三木郡の条里の区画を考える時、二条・三条・四条という地名が残っていることから、一条は六町(約六五四メートル)であるので、旧山田郡との境までに八条あったと推察され、現在の三木町と高松市との境の線(やや傾いた南北の直線)が旧三木郡と旧山田郡の境と考えられます。この郡境の線から一〇九メートルの間隔で東に向かい、白山と山大寺池を結ぶ線まで来ると、この線が三木郡の四条と三条の境となります。下高岡地区四条集落の東側の線は、おおよそ条里復元線の四条・三条の境の線に一致しています。ところが、三木郡の四条から三条に入ったとたん条里の南北線は屈曲し、東の寒川郡の条里の線に平行するようになります。平野部の広がりとは南海道の方向性によるものと思われませんが、線引きを決める時、寒川郡の方との調整が必要だったことでしょう。

次に、東西の線である里の区切り方ですが、古代の南海道の線を基準線にして、現在の地割りや道路を参考に、ほぼ一〇九メートルごとに区切ってみると、南は平野部

の終わるところまで条里があつたと思われます。北も同様にして区切つてみた結果、左のような復元図が完成します。里数は、一里から十一里くらいと推察されます。



条里を復元

してみると、田中と氷上の境や、氷上と上高岡・下高岡との境が条里の地割に一致していることがわかります。

志度の多和文庫に、平安時代後期の写本とみられる「弘福寺領讚岐国山田郡田図」が

あり、この田図には、天平七年（七三五）の年紀と、条里の区画と思われる線が見られます。この田図の場所は、現在の高松市林町付近に当たり、山田郡と三木郡の条里の関連性から考えると、三木郡の条里も七三五年以前に基本的な地割りが行われていたと思われる。

6 鰐河神社わにかわ

祭神 豊玉姫命、応神天皇

由来 三木郡高岡郷（下高岡・上高岡・西鹿庭・西奥山）の産土神（土地を守護してくれる神様）を祭り、四条八幡宮または高岡八幡宮の名で知られていました。「延喜式」讃岐二十四社の一つ「和爾賀波神社」がこの神社だといわれていますので、そのとおり信じれば、鰐河神社の創祀は平安初期までは確実に遡ることになります。立地条件から見れば、豊富な水の湧く所なので、農業に必要な水の神を祭ったのが始まりではないかと考えられます。また、高岡郷の上高岡と下高岡の接点なので、両者の共に祭れる場所を選んだとも考えられます。



鰐河神社

伝説では、「昔、海神・綿津見神わたつみの娘である豊玉姫命は、亀に乗って山田郡潟元（現

高松市屋島西町）へ来て、鵜茅葺うかやふきあえずのみこと不合尊を産んだ。そのため、

その地名は浦生うろと呼ばれた。その後、鰐わにに乗って新川を遡り四条に來たので、ここに祠を建てて豊玉姫を祀った。そこで、この神社を鰐河神社と呼ぶようになった」ということです。

「極楽寺宝蔵院古曆記」には「延喜七年（九〇七）四月、宝蔵院の明印が、一郡一八幡の始めとして、三木郡には高岡八幡宮を勧請した」とあるので、単に高岡郷の氏神としてではなく、三木郡全体の中心の神として祭られたようです。ただ、八幡神の勧請は、実際には平安後期以後のことと考えるのが妥当だと思われます。

江戸末期に書かれた「讃岐国名勝図会」には、「往古、当社内陣へ和爾賀波の神体を納めおきしことありと古*いへり*」とあります。

鰐河神社の西隣には応神寺があり、鰐河神社の別当を務めました。現在さぬき市造田の願興寺にある重要文化財の乾漆聖観



神橋の傍らの「水神社」



鰐河神社正面の神橋

音坐像（奈良時代）は、もと応神寺にあったものですが、明治の神仏分離で応神寺が廃寺となったとき願興寺に移されたものです。上高岡三条で奈良時代の上高岡廃寺が見つかっていることから、重要文化財の乾漆仏はもとと上高岡廃寺（「極楽寺宝蔵院古曆記」に見える高岡山田寺か）にあったものが、後に応神寺に移されたものかもしれません。

現在の本殿は昭和三年（一九二八）に改築されたもので、正面の神橋は昭和七年に架けられたものです。

鰐河神社の東側の南北線は三木郡の三条と四条の境の線に一致しています。

7 願勝寺と静御前の墓

宗派 真宗大谷派 塚脇山頓乗院願勝寺

本尊 木造阿弥陀如来立像

由来 開基は佐々木三郎盛綱といわれています。盛綱は源平合戦後、仏門に入り源光坊と称し、建久元年（一一九〇）に寒川郡西村に来て約一年間住み、三木郡鹿庭村別所で寺を建て願勝寺と称しました。六〇余年の後、寺は三木郡朝倉村へ移り、天文年間（一五三二〜五五）には田中村へ、弘治年間（一五五五〜五八）には下高岡村四



鰐河神社東側の南北線と白山

条へ移り、さらに天正年間（一五七三〜九二）に現在地へと移転しました。

文禄三年（一五九四）、豊臣秀吉が本願寺の教如上人を退け、准如上人を主とすることにしたとき、高松の福善寺、陶村の浄福寺の住職とともに願勝寺の住職もこれに反対したため、獄舎につながれましたが、秀吉の死後許されて寺に帰ったということです。「讃岐国名勝図会」によれば、浄福寺は願勝寺・福善寺とともに篔原御坊のほらの輪番でしたが、天正の兵火に遭って廃寺となり、その本尊は四条の願勝寺にあるという記録が残っています。

願勝寺境内には、静御前の墓があります。

出家した源光坊（佐々木盛綱）は、静御前とその母磯禪師が讃岐に入り、源義経やその子、戦死した家来たちの菩提を弔っているという話を伝え聞き、讃岐へやって来ましたが、その時既に静御前親子はこの世に亡く、二人の菩提を弔うため一字を立てて願勝寺と名



静御前墓（願勝寺境内）



願 勝 寺

付けたという話が残っています。願勝寺には、ほかに、佐々木盛綱の念持仏といわれる阿弥陀如来像や、静御前の位牌があります。

また、願勝寺の梵鐘は、静御前の舞い姿が浮き彫りにされています。初代の梵鐘は正安年間（一二九九〜一三〇二）頃に鑄造されたといわれ、享保二年（一七一七）に一度再鑄されましたが、太平洋戦争中に供出され、現在のものは戦後再鑄されたものです。

8 浄土寺

宗派 真言宗善通寺派 高木山十楽院浄土寺

本尊 木造阿弥陀如来坐像。快慶の作と伝えられています。

由来 「極楽寺宝蔵院古曆記」によると、「承平六年（九三六）に明海が諸社に別当を置いた」という中に井戸浄土寺の名があります。寺伝も同じく、現在地の東北の二条に一字を建立し、弘法大師三尊を安置し、「神照山十楽院浄土寺」と称したと伝えています。天正年間（一五七三〜九二）に長宗我部の兵火に遭い、堂宇や記録が



浄土寺

消失しましたが、その後、閑祐師が二条から今の地に移して山号を「高木山」と改めました。

9 静薬師庵

三木町井戸地区中代なかだいの鍛冶池のほとりに老松の木立に囲まれて静薬師庵があり、静御前の墓と伝わる五輪塔があります。伝説では、讃岐へ来た静は、長尾寺で得度を受け、髪を下ろして尼となった後、この場所にあった草庵で、母の磯いそのせんじ禅師、侍女の琴路ことじとともに、源義経や、男子であったため生後すぐに殺された我が子、源平合戦で亡くなった者たちの菩提を弔いながら暮らしていましたが、ある日、母磯禅師が倒れて亡くなり、その後、間もなく、静御前も病のためか息を引き取りました。後に残された琴路も、女主人の後を追う様に鍛冶池に入水して亡くなったと語り伝えられています。この庵は、その後何度か建て替えられ、現在、「静薬師（静薬師庵）」と呼ばれています。庵の傍に静御前の墓があり、静の子の墓、琴路の墓もすぐ隣に建てられ、地元の人に大切に祀られています。



静薬師庵

※ 静御前の伝説

源義経が愛した静御前は、生没年は不詳ですが、磯禪師の娘で、舞曲にすぐれた美しい白拍子（舞姫）であったといわれます。文治元年（一一八五）頼朝と不和になった義経が京都の六条堀川亭で遊んだとき、静と親しんだのが、二人の出会いでした。その年、義経と吉野で別れたあと、翌文治二年に捕らえられて鎌倉に送られます。静は頼朝から義経の所在を尋問されましたが、知らないと言い通し、四月八日に鶴岡八幡宮の回廊で義経を慕う舞を舞ったのは有名な話です。九月、静は許されて京都へ帰りますが、その後の足跡は史実に見ることができません。

伝説では、このあと静は、母の磯禪師が大内町丹生小磯（現東かがわ市）の出身であったという縁から讃岐へ来、長尾寺で得度して尼になり、この三木町の地で亡くなったということです。静御前の墓は願勝寺と、鍛冶池のほとりの静薬師庵にあります。

静の伝説と墓は讃岐以外にもたくさんあり、例えば、淡路島の羅漢院福母寺、長野県大田市社町丑館の薬師寺、新潟県栃尾市栃堀の高徳寺、埼玉県北葛飾郡栗橋町伊坂、福島県郡山市大槌町静などです。



静薬師庵傍の静御前墓（右端）

讃岐における静の伝説の成立には、小磯の長町家、長尾の長尾寺、三木町の佐々木氏がかかわっていると考えられます。

10 二条城跡

城主は、佐野久兵衛で、安富氏に従っていたといふことです。

「全讃史」に、「井戸村に在り、佐野久兵衛、之に居りき。或は云う佐久間六郎兵衛、之に居りき」とあり、「讃岐国名勝図会」には「同所柏木にあり、一説には佐野久兵衛の居城なりしと、佐久間六兵衛某ここに居たり」とあります。「新撰讃岐風土記」によると、城跡は井戸村字二条妙見社地とありますが、正確ではありません。現在、妙見社付近は工事によりほとんど平地となっていて、昔の面影は残っていません。

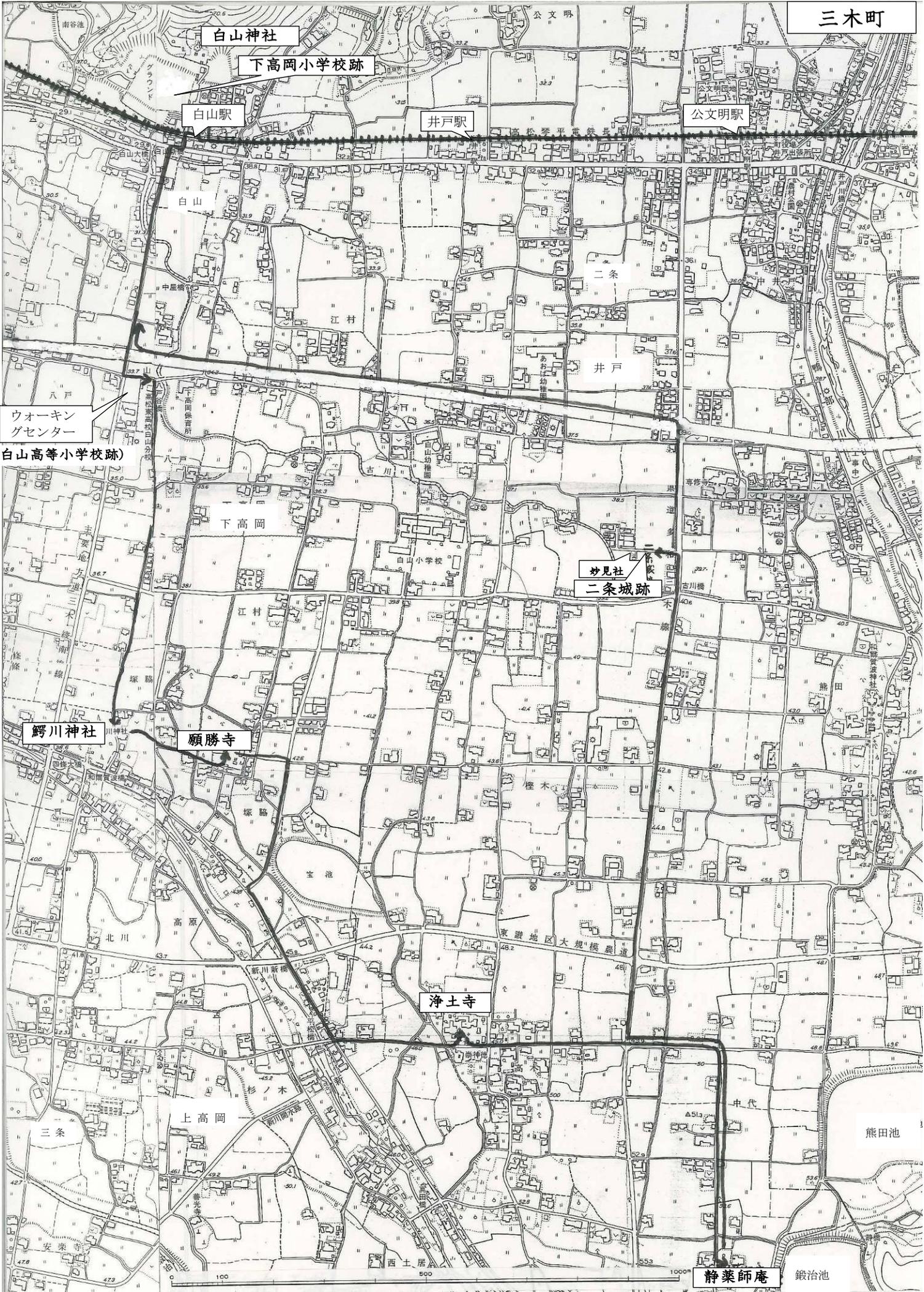


二条城跡といわれる付近

【参考文献】

- 『三木町史』 昭和六十三年三月三十日 三木町発行 三木町史編集委員会
『三木町史 現代史編』 平成十六年九月二十日 三木町発行 三木町史編集委員会
『その後の静御前』 ホームページ (横井 寛氏編)

三木町



白山神社

下高岡小学校跡

白山駅

井戸駅

公文明駅

ウォーキング
センター

(白山高等小学校跡)

妙見社

二条城跡

鱈川神社

願勝寺

浄土寺

静薬師庵

鍛冶池

2月26日（日） 三木町からの復路

ことでん長尾線

(白山駅)		(瓦町駅)
12:13 発	→	12:40 着
12:33 発	→	13:00 着
12:53 発	→	13:20 着

次回のふるさと探訪は・・・

テ ー マ 堂山山麓に社寺を訪ねる

と き 平成24年3月18日（日）

9:30～12:00

集合場所 ことでん岡本駅（琴電琴平線）

講 師 廣瀬 和孝（高松市文化財保護協会顧問）



☆広報「たかまつ」3月15日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆天候等により中止の場合のみ文化財課（TEL 839-2660「午前7時～開始時間まで」）でお知らせします。
（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★集合場所への交通案内★-----

【ことでん琴平線・下り】

(瓦町駅)		(岡本駅)
8:35	→	9:00
9:05	→	9:30

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょ
う。
(必ず、歩道を歩き、歩道が無いところでは、道
路の端を一直線で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょ
う。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょ
う。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気
をつけましょ
う。
- 5 文化財や自然を大切にしましょ
う。